釣れ釣れなるままに

２００９年思い出の釣行記 PART.　５

ハモンモる

鹿島釣狂

☆釣 行 日　　平成２１年８月２２日
☆入釣場所　　苫小牧西港　南埠頭　係留杭１４
☆釣　　果　　ハモ　６本（５４，５２，４８，４６，４１，３９）

昨年度、前野氏に誘われて浜厚真漁港でハモ釣りに初挑戦したが、新参者を相手にしてくれるようなハモなどいなかった。しかし、４０㎝程のハモを釣りあげた隣の釣り人が物欲しそうに眺めていた私を見かねて、その唯一の獲物を差し出したのだ。それを天ぷらにして食べてみたらフワフワととても美味しくて是非とも自分で釣り上げてみたいものだと思っていた。

前野氏からお誘いがかかる。２週間前に苫小牧西港南埠頭でハモを６本釣ったので一緒にどうだというのだ。女房は、全国合唱コンクール出場のため四国松山にそそくさと出かけて行った。私はハモ釣りの仕掛け作りに精を出す。基本をカレイ仕掛け６組とし、予備として市販のタカノハ仕掛けを真似たものを２組作った。

午後２時の待ち合わせだったが、することもなく３０分前には前野氏宅に着いてしまった。愛想のよい息子さや奥さんが出迎えてくれて、ご主人が釣りで出かけても店は安泰のように思える。途中、美園で西川氏を乗せて苫小牧港に向けて出発した。その西川氏宅の物置に種分けされてぶら下がった様々な仕掛けは圧巻だった。

苫小牧西港南埠頭に着いた。私は苫小牧港で釣りをするのは初めてである。前野氏が持ち込んだ釣り新聞には菅原隆氏によるハモ釣りの記事が載っていた。２週間前は苫小牧東港勇払水道で８本、１週間前は苫小牧西港中央南埠頭で４０㎝～６０㎝を１８本というものだ。

前野氏は菅原氏が記事にした中央南埠頭と自分が釣りをした南埠頭とを混同していたようだ。道中、新聞記事を頼りに釣り人がドットと押し寄せて私たちが入る釣り場がないのではという心配は前野氏の勘違いで御和算になった。私が目指していたのは菅原氏の記事にあった中央南埠頭で、前野氏が目指していたのは南埠頭だった。南埠頭では丁度３人がスッポリと入れるスペースがあったのでそこで並んで荷を下ろす。

私は早速、欲張って３０号２本、２５号２本の竿を出す。天気は上々で右斜め後ろから吹いてくる風が追い風となって飛距離が出たが、道糸が左に大きくふけて次の仕掛の投入を妨げてしまう。その対策のために三脚を低くした。さらに、着水後すぐに海面まで竿先を下げて、仕掛けが着底したのを確認してからゆっくりと道糸を張るようにした。

４本の竿を立てるがアタリは出ない。西川氏と私の間に誰かが置き忘れた荷物があり、そのお陰で入釣者がおらず、あずましい釣りが出来た。

右に５０ｍ程離れた釣り人がクロガシラ２５㎝を２枚あげていたので明るい内はクロガシラに期待が高まる。しかし、全くアタリは出ず、上がってくるのはバカでかいヒトデのみだった。

午後７時、夜の帳が下りて港の照明が輝きを増したがアタリは出ない。８時、ようやくフワフワとしたアタリが出たがアワセのタイミングがとれないので、前野氏にハモのアタリについて確認してから竿を煽ると、グックと乗った。時々強く刺さる感じが伝わってくるので保安官ではなさそうだ。ヘッドランプの光の中で水飛沫をあげた魚影は、紛れもない４０㎝程のハモだった。獲物は小さいが私にとっての初ハモである。私をハモ釣りに誘い出した前野氏が自分のことのように喜んでくれたのが何より嬉しかった。

９時までの１時間でさらに３本を追加する。アタリが集中したのは２５号竿である。道糸に縒り糸を使っていたので３０号の竿ではエサをくわえ込んだハモが違和感を覚えて離してしまうのではないかと考えられる。３０号竿を揃えている前野氏、西川氏にはアタリさえ出ない。

９時半、潮止まりだったが、ようやく前野氏にも西川氏にも６０㎝を超える型モノのハモがあがり始めた。私もさらに１本を追加し、日をまたぐ時刻に道糸を弛めておいた３０号竿に１本来たのを最後にして竿を畳んだ。暗くなってからは風も治まり、天気もよく快適な釣りが出来た。

奈井江の自宅に着いたのは午前３時を回り、風呂に入って疲れを癒し、世界陸上を観戦した。ボルトは１００ｍ、２００ｍの世界記録に併せて４００メートルリレー決勝でも勝ち、３個目の金を獲得した。私も初ハモと、取りあえずは５４㎝の新記録を樹立した日だった。

ハモはこのケミカルホタル２５レッドを付けた仕掛けにばかり食いついた。

ハモを背開きにする

①キリでハモに目打ちをする

②頭側から背開きにする

③内臓を取り出すと胃から子ハモが出て来た

④きれいに内臓を処理する。

⑤再度、目打ちをして中骨を取る。

⑤蒲焼きは少し焦げてしまったか

８／２２の釣果。３９㎝～５４㎝

☆釣 行 日　　平成２１年９月１３日

☆入釣場所　　苫小牧西港　南埠頭　係留杭２

☆釣　　果　　アナゴ　６本（６０リリース?，５６，５０，４９，４４，３２）
　　アブラコ４８㎝１　マガレイ１

職場の重要な行事が大成功の内に終わり、明日は振替休日なのでハモ釣りに向かう。前回、菅原隆氏が釣り新聞で記事にしていた苫小牧中央南埠頭の様子を見に行く。アブラコやカレイを狙っているという釣り人が２組いて、入江に向かって竿を出していたが、目指す紅白の鉄塔下にはヒトデが山のように積まれていたので入釣を控えた。

前回釣りをした南埠頭船舶係留杭１４番には貨物船が接岸しており、その左右にも釣り人が並んでいたので竿を出すことが出来ない。周辺の釣り人はハモ狙いではなく、カレイやアブラコ、ソイ、イワシ、サバを狙ってノンビリと竿を出している。日曜の午後のひとときを釣りでもしようかとやって来たように思える。

漁港との境の角には３名の若者が投げ竿、サビキ釣り、そしてワームと様々な出で立ちで釣りをしている。茶髪頭で入れ墨を模したＴシャツを着込んで釣りをしている姿が『ムジナ』が屯している姿と重なり合った。その『ムジナ』達に声を掛けると、胡散臭そうな目で睨み返して話し言葉もケッタルイ。チンピラ姿でも文句はないが釣りをするなら若者らしく爽やかに話してもらいたいものだ。漁港では中学生や小学生の集団が釣りをしているのが見え、サビキで魚を釣ったらしく喜々とした歓声を上げている。お子様方、この『ムジナ』達のようにはなるなよ！

係留杭４番もよい場所だと聞いていたがカレイ狙いの釣り人が入っている。酒を飲んでいるらしく真っ赤な顔で頭に載せた帽子の横から大きな耳が覗いている。『アカイカ』と名付けておこう。『アカイカ』は車の中から竿先を見つめていたがその内に大鼾をかいて眠ってしまった。

『ムジナ』と『アカイカ』の中間になる係留杭２番で竿を出した。まずはクロガシラを狙ってイソメとサンマのエサで遠投する。恒例のヒトデをあげていると小さいが明確なアタリが出た。引き寄せている間も魚が付いているのがわかる。手の平大の真ガレイがイソメに食いついていた。続けて隣の竿にも大きなアタリがあり真ガレイを放置して竿を煽る。ググググッ、ググググッと竿先を締め込み、遠投していたためなかなか寄ってこない。クロガシラだとすると相当な大物だ。しかし、海面に姿を現したのは大アブラコだった。タモ網は持っておらず、道糸やハリスを４号に落としていたので心配だが抜きあげなければならない。アブラコが海面を叩く音に『ムジナ』達や『アカイカ』が寄ってきた。空気を吸わせて落ち着いたところをソロ～リと一気に持ち上げる。腹のデップリとしたアブラコがサンマを咥えており、メジャーを当てると４８㎝を指していた。

ベルトにジャラジャラと鎖を付けた『ムジナ』が素っ頓狂な高い声で「デカパンだ」と叫ぶ。そして、唇にピアスを付けた『ムジナ』が「まぐれだよな」と龍模様の革ジャンを着た『ムジナ』囁く。眠っていると思っていた『アカイカ』も「旨そうだな」と呟く。その声を聞き流しながらアブラコをフラシに入れて係留杭に縛り付ける。真ガレイの方はリ

リースしてやる。『ムジナ』達や『アカイカ』の帰り姿に少し元気が出たように思えた。
　ＡＮＡのパイロットのような帽子をかぶった釣り人がやって来た。『アナ』がぶら下げたフラシを見て「いいですか」と人懐っこく尋ねる。フラシの中のアブラコを見た『アナ』は早速、近くの隙間に荷物を下ろした。昨日は雷を伴った雨の中、ハモを狙って入ったが１本も手にすることが出来ず、今日はイカ釣りにねらいを定めているということだ。人の良さそうな『アナ』はこの港の状況をつぶさに教えてくれた。
　係留杭１番と２番の間は１ｍ程の高さのフェンスになっている。そこへ、今度はひげ面で何か文句がありそうに口をとがらした穴熊のような釣り人が現れた。こちらが親しげに話し掛けても返ってくる応えがぶっきらぼうで、つっけんどんである。なんでも毎日のようにこの港で釣りをしており、５月は４０㎝程のクロガシラを２枚釣ったらしい。今日の狙いはハモですかと問うと「ハモではない。アナゴだ。ハモは銀ピカで鋭い牙がある」と諭された。昨日もこのフェンス前で竿を出したがボウズで仕掛けも２組失ったらしい。『穴熊』は、「ここは根掛かりすることがないのだが漁師が何か投げ込んだのだろう」と、とがった口を更に突き出して言う。そして、『ムジナ』達を指差して、「あそこにある荷物は俺のものだ。俺の縄張りをあいつらが占領して平気な顔をしている。これから文句を言いに行くが挨拶もせんだろう」と『ムジナ』達の方へと向かった。しかし、『ムジナ』達と一言二言言葉を交わしたようだったが多勢に無勢ですごすごと引き上げてきた。私のところへ来てから、「どうせ釣れないんだから早く帰れ！」という捨て台詞を『ムジナ』達に届きそうもない声で呟いた。そして『穴熊』は『アカイカ』が帰り仕度をし始めたのでその場所に荷物を移動させ三脚を構えた。
　今日は低く垂れこめた雲のために夕闇が迫るのも早い。周辺では昼間竿を出していた釣り人達が徐々に引き上げてアナゴを狙った地元の釣り人に替わった。『ムジナ』達も引き上げてそこに『アナ』が入った。『アナ』はサビキ釣り師からチカを貰ってきて、それをエサにイカ釣りをするという。アナゴは冷凍庫に十分入っているので、夕食の肴をイカに変えていくらしい。そして６時半に近づいて来たのでそろそろアナゴもイカもやってくるよとおっしゃる。
　カレイ仕掛けからケミカルホタルを取り付けたアナゴ仕掛けに取り替え、竿先にギョギョライトを付ける。その途端、フワフワとしたアタリが出て、慎重に合わせると乗った。海面を叩いて上がってきたのは６０㎝を超すアナゴだった。『穴熊』、『アナ』も覗いていく。アブラコを入れたフラシを引き上げて、その網の目をアナゴの頭がくぐり抜けることが出来ないことを確認してから入れる。周辺の釣り人たちが一気に活気づいたように感じた。
　尿を催して用足しをしてから釣り場に戻ると、『穴熊』が「こちらから２番目の竿が引いていたぞ」と教えてくれる。その竿のフケた道糸を張っている途中でアタリが出たので竿を煽った。４０㎝ほどのアナゴがイカを咥えていた。小物のため網の目をくぐり抜けてしまうと思いこれはクーラーに入れておいた。
　アタリが小さく、あったとしても途切れてしまうことが何度か続いた。糸の張り具合を

念入りに微調整していると３０号の竿尻が跳ね上がった。これも６０㎝弱のアナゴだった。フラシに入れようと引き上げると先に釣ったアナゴが見当たらない。逃げ出してしまったのだ。『穴熊』に話すと「バカだなあ。アナゴはアミを食いちぎるんだ。」ととがった口を曲げられた。編み目を確かめてみても食いちぎられた様子はないので、どうも編み目を通り抜けたらしい。少しでも長く生かしておいて旨いアナゴにありつこうとしたことが仇(あだ)になった。残念ながら２匹目となったアナゴをクーラーに仕舞い込む。

『穴熊』が埠頭の縁を歩いて捜し物をしている。「誰だ？ゴミを散らかしたのは？」と独り言のような文句を言いながら私に話し掛けてきた。『穴熊』の捜し物は竿先ライトのプラスチック製の留め具だった。５０㎜ケミカルライトを仕掛けに取り付けるために留め具を加工して使うらしい。『穴熊』は自分が貧乏人だからと言う。私はリサイクルを意識したクリーンな人柄だと思い、自分のゴミ袋を引っかき回してその留め具を差し出した。『穴熊』は初めてとがった口を緩めて釣り場に戻った。

『穴熊』の隣に携帯電話で連絡を取っていた仲間が入った。ヌベッとした顔立ちなので『アナコンダ』と名乗らせていただこう。それでようやく『穴熊』にもアナゴ６０㎝級が来た。連れの『アナコンダ』が「うまそうだな。これ１本でもう十分だろう。早く帰って寝てしまえ」と舌がとぐろを巻くようにして言った。

その後、３本を加えたところで日付をまたいでしまった。今日は月曜日なので、さすがに地元の人でも躊躇する時間帯だ。人気のなくなった港で心細くなり私も竿をしまった。

９／１３の釣果。アブラコ４８㎝をフラシに入れたのが大アナゴをリリースした要因となった。アナゴの頭は編み目より大きかったはずだったが・・・。

前回よりはきれいに捌けたと思う

☆釣 行 日　　平成２１年９月１９日
☆入釣場所　　苫小牧西港　南埠頭　係留杭２２
☆釣　　果　　アナゴ　３本（５０，４９，３３）

１７日から１９日にかけて新冠で会議があり、２０日は日曜日なので出かける前に釣り道具一式を荷台に積み込んだ。１９日午前中で会議が終わったので、宿泊した静内町の「ほてる・ぷち・ぽわん」で背広から変身して、まずは様似町白里谷、東平宇の海岸線に向かった。モベツ川、シイチカップ川、白里谷でタカノハを狙って釣りをするつもりでいたが、丁度満潮時間帯だったためにバラ根がよく分からず、苫小牧港でアナゴ釣りをすることにした。

高速無料区間（富川～鵡川～厚真）を通り苫小牧西港に向かうが、車の流れに沿って高速を出たところから国道２３５号線を突き切って東港フェリーターミナルに出てしまう。後戻りを繰り返しながらなんとか西港に着いた時は午後６時の時合いを回っていた。

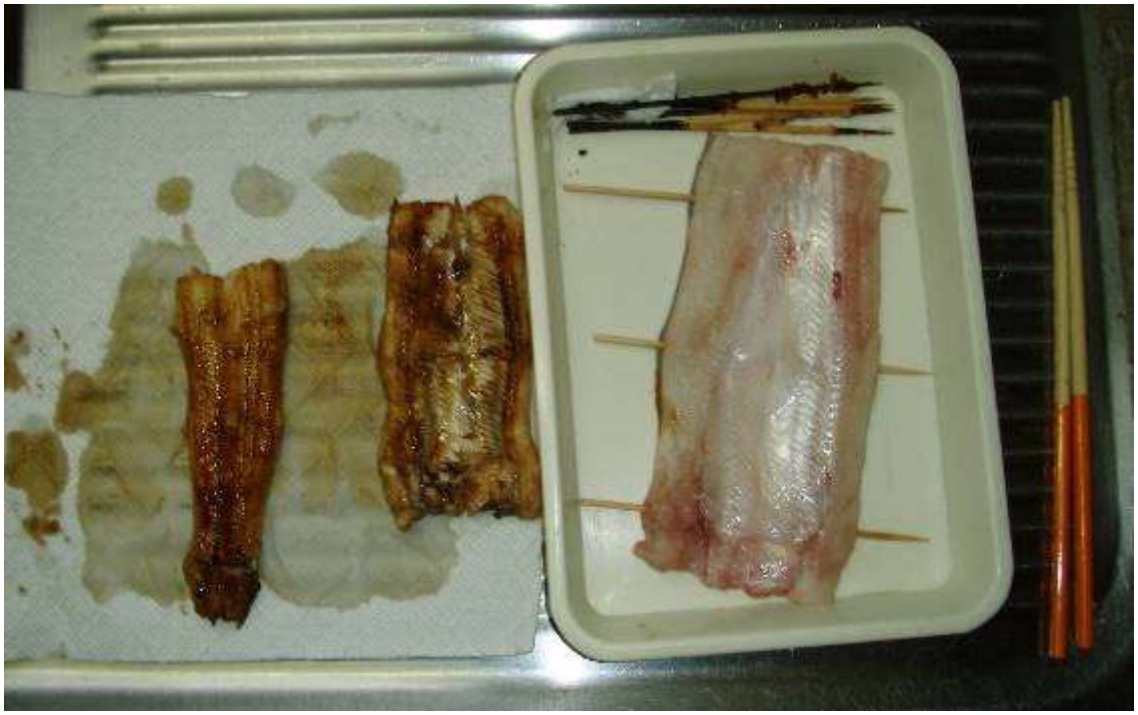
南埠頭では大きな貨物船が２艘停泊していたので釣り場がなく、やむなく貨物船と貨物船の狭い隙間から竿を出すことになった。そのために、勇払埠頭方向からの風で道糸が右方向に流されて、貨物船の舳先の上になってしまう。午後７時にきた１本目となる５０㎝は貨物船の向こう側から引っ張り出すことになった。

前回釣りをした係留杭２では『穴熊』と『アナコンダ』が仲良く釣りをしていた。『穴熊』は釣果がなく、『アナコンダ』が３本仕留めていて、『穴熊』のぼやきは健在だった。係留杭１で親子連れが１本を仕留めてバッカンに入れるところで、やはり『穴熊』がアナゴの講釈を宣っていた。私はその後、２本のアナゴを追加して竿を仕舞った。

家に帰ってから、アナゴを水に入れてみると、まるで生きているかのようだった。捌いてみると胃の中からは子アナゴが出て来たが、前回といいアナゴの食事は共食いとなっているのだろうか。今回は、静内のえびすや釣具店で買ったアナゴの仕掛に付いた「ささげとしおの釣りたてクッキング」「ジュジュッとアナゴ・ウナギの蒲焼き料理レシピ」を参考にして蒲焼きに挑戦してみた。アナゴに串を刺して白焼きした後、タレを付けて再度焼いたのだ。余分な油を落とし黄金色に仕上がった蒲焼きは、口の中でフワフワととろけるようになくなった。

９／１９の釣果に水を張る。まるで生きているようだった。

やはり胃の中から子アナゴが出て来た。他に食べ物はないのだろうか。



焼き上がったものは串の刺す前のものと同じ大きさだったのだが、並べてみると随分と縮まったのが分かる。

作品Ａ。きれいな色に仕上がった。もちろん大変旨かった。

☆釣 行 日　　平成２１年９月２２日
☆入釣場所　　苫小牧東港　浜厚真漁港と周文埠頭間の砂浜
☆釣　　果　　アナゴ　３本（４５，３２，３０）

シルバーウィークと称した９月１９日～２３日の５連休を利用して、息子が帯広から出て来て２泊していった。息子がいる内は酒を酌み交わしながら世情を憂えた話で気を紛らわせていたが、帰ってしまうと手持ち無沙汰になってしまう。丁度その時に電話が鳴る。前野氏からで２２日にアナゴ釣りのお誘いが掛かる。

「つりしん北海道」でまたまた菅原隆氏の記事が紹介され、浜厚真漁港と苫小牧東港周文埠頭間の砂浜でハモ２６本を大釣りしたというのだ。午後６時～７時に食いが立ち、５０ｍ～６０ｍほど先のカケアガリの向こうから釣れ続いたとある。

前野氏と午後３時に待ち合わせて、地図を頼りに東港に向けて出発した。目的地は、先日迷い込んだ東港フェリーターミナルの埠頭の左にあった。なるほど５０ｍ程先の海中からフェリーの座礁を警告する赤いランプが点滅して突き出ていた。フェリー岸壁角に釣り人がいたが、フェリーが岸壁間際を通るたびに竿上げしなければならない様子だった。

砂浜の中間で竿を出す。菅原氏がいうように左から延びるテトラが５０ｍ先で海中に沈んで見えなくなっている。右に前野氏が陣取る。すぐ後から４名の釣り人が様子見に来たが、違う場所を目指したようだった。その後に２人組がやって来て、一番右端に釣り座を構えた。４人もの釣り人が入るとそこはほぼ満杯の状況になった。

アタリはあるのだが、それがドンコだったり、ソイだったりで調子が出ない。しかも潮が引き始めて途中のテトラに根掛かりしてしまう。菅原氏の記事の内容とはかけ離れていくので心細くなってきた。前野氏に鉛筆アナゴがかかった。私にもようやく５０㎝がきた。前野氏が潮の引いた左のテトラ付近に移動していった。その前野氏が陣取ったテトラの向こうからアタリが出て抜きあげると、上バリにソイがかかっており、下バリにはテトラに付いた海藻の塊がぶら下がってきた。その塊の中に鉛筆ハモが申し訳なさそうに隠れるようにしてぶら下がっていた。

さらに、前野氏が今度は右端に移動して５０㎝のアナゴを抜きあげた。しかし、移動を繰り返している内に釣り上げたハモに逃げられてしまったようだ。歩いた後を追いながら捜し回って、なんとか大きい方の１本だけを回収できたようだ。その後、私に鉛筆が１本かかり、前野氏から会心の１本をいただいて４本にしたところで終わりにした。

今年はアナゴ釣りという新たなジャンルに踏み込んだ年だった。何より獲物がおいしいこともあってやみつきになってしまいそうだ。釣り場でご一緒した『ムジナ』『アカイカ』『アナ』『穴熊』『アナコンダ』様々方、いろいろとご指導いただいたお陰で楽しい釣りが出来ました。ありがとうございました。

９／２２の釣果